



ぼっぼ屋



輸送サービス労組 東京支部

2025.8.13
NO.012

日航ジャンボ機墜落事故から40年

～過去の教訓を現場から問い直さなければいけない～



当時の日本航空と今のJR東日本の共通点 「安全より利益優先な経営姿勢」

当時の日本航空

整備部門の要員削減や外注化が行なわれ、現場の安全は大きく低下。

現在のJR東日本

要員削減、様々な業務を委託しコストカット。一人一人の業務量が増加。

「現場の声を聞かない経営陣」

当時の日本航空

機体の不具合や懸念など現場が声を出しても経営・管理部門が軽視。

現在のJR東日本

労働組合が団体交渉で指摘しても会社経営陣は聞く耳を持たない。

1985年8月12日、日航ジャンボ機墜落事故は520名の命を奪い、日本の交通史に深い傷を残した。事故から40年経った今、同じ公共交通機関で働く私たちの現場がどうであるか今一度考え直さなければいけない。近年、JR東日本では南武線・常磐各駅停車での戸ばさみ事象や新幹線での車両不具合による運休、山手線架線設備トラブルによる長時間の運転見合わせなど、重大事故一步手前の事象が続発している。背景にはジョブローテーション施策、業務の複務化、要員不足など当時の日本航空と同様に利益優先・運行優先・過度の効率化が行われている。

事故が発生しても共有はタブレット配信のみ、原因究明に至っては「本人へ指導する」の一点張りで具体的な安全対策はなく、現場では「対岸の火事」になっており教訓化されていない。公共交通は一度事故を起これば、多くの命、信用と信頼を失ってしまう。過去の事故・事象を風化させず、安全最優先の現場体制を作り直すことこそ、私たちの責務である。輸送サービス労組をはじめとする現場で働く社員は次の悲劇を防ぐために、声を上げ続けなければいけない！

事故現場での犠牲者への

祈り捧げる灯籠流し

